

# 男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ

－府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区（双子上池）に伴う－

2004年3月

大阪府教育委員会



## はじめに

平成7年度から9ヵ年にわたって実施してまいりました泉南市双子上池・下池の堤体改修に伴う男里遺跡の発掘調査が今年度で終了することになりました。一年毎の調査面積は決して広いとはいえませんが、9年間に及ぶ継続調査は、遺跡の実態解明に欠くことのできない多くの成果を生み出しました。男里遺跡が、泉南地域で最も早く弥生文化の成立した場所であることや、古墳時代前期にも集落が営まれていたこと、奈良時代以後にも遺跡が続いていることなどは、この発掘調査によって明かされた成果のごく一部に過ぎません。遺跡を正しく理解するために、小規模であっても、継続的な調査とその成果の積み重ねが必要不可欠であることを示す好例といえましょう。

男里遺跡は、泉南地域で最も早くに周知された遺跡の一つであり、かつ地域を代表する弥生時代遺跡の一つでもあります。道路や宅地の整備が進んだ今日、遺跡に立って連綿と繰り返り広げられた古来の人々の暮らしぶりに思いをいたすことは容易ではありませんが、地域の歴史にかけがえのない遺跡がその足元にあることを知って頂くために、今回の調査の成果が広く利用されることを願ってやみません。

9ヵ年にわたる発掘調査の間、地元の方々ならびに関係諸機関には多大なご協力を賜りました。最後になりましたが、改めて厚く御礼申し上げるとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご協力とご理解をお願い申し上げます。

平成16年3月31日

大阪府教育委員会

文化財保護課長 向井 正博

## 例言

1. 本書は、府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区(双子池)に伴う、泉南市男里所在男里遺跡における発掘調査概要である。

2. 調査は、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が行った。

3. 現地調査は、泉南市教育委員会生涯学習課の協力を得、文化財保護課主査藤澤真依および泉南市教育委員会河田泰之を担当者として、平成15年10月から同年12月まで行った。

遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ技師林口佐子・小浜成を担当者として行った。

4. 調査に要した費用は、農林水産省と文部科学省の補助金を得、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。

5. 本書で使用した座標は、世界測地系国土地院第Ⅵ系、方位は座標北、標高はT.P.(東京湾平均海面)である。

6. 航空写真測量は、(株)ウエスコに委託し、撮影フィルムは同社において保管している。

7. 遺物の写真撮影は、(有)阿南写真工房に委託した。

8. 本書の執筆、編集は、高島・藤澤および河田が行った。

9. この概要は300部作成し、一部あたりの単価は861円である。

## 目次

第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡の環境	2
第3章 調査成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構と遺物	8
第4章 まとめ	20
報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 既往の調査区(左)と 調査区に設定したグリッド(右)	2
第3図 周辺の主な遺跡	3
第4図 男里遺跡における既往の調査	5
第5図 I・II層の遺物出土状況	8
第6図 調査区平・断面図	9・10
第7図 II層出土遺物	11
第8図 Pit07出土遺物	11
第9図 SD01出土状況・断面図・出土遺物	12
第10図 流路1平・断面図	14
第11図 流路1 1層出土遺物	15
第12図 流路1 2層出土遺物-1	16
第13図 流路1 2層出土遺物-2	17
第14図 流路1 3層出土遺物	18
第15図 SH01平・断面図と出土遺物	19
第16図 双子池における遺構の変遷-1	22
第17図 双子池における遺構の変遷-2	23

## 表目次

第1表 平成12年度以降の調査成果	6
-------------------	---

## 図版目次

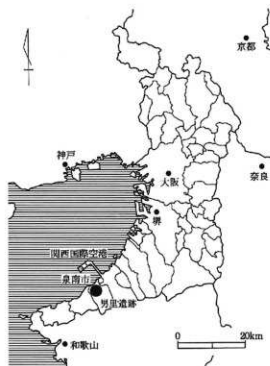
図版1 調査区全景
図版2 流路1
図版3 SH01
図版4 SD01・SX01・ビット
図版5 出土遺物1
図版6 出土遺物2

## 第1章 調査の経過 (第1・2回)

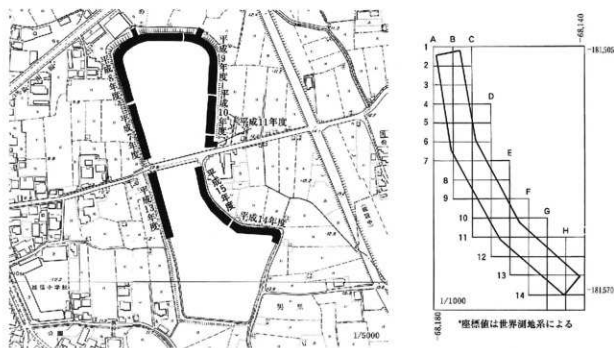
男里遺跡は古くから堺市の四ツ池遺跡、和泉市の池上曾根遺跡、岸和田市の下池田遺跡、と並んで弥生時代における地域の中心的な集落跡として知られていた。幸いにも大規模な開発があまり行われなかったため、その詳細については不明な点が多かった。そういう状況の中、空港関連事業の一つである道路建設が計画された。遺跡中央部を南北に縦断する道路で、財団法人大阪府文化財協会により調査が開始され、弥生時代中期の堅穴住居、掘立柱建物や方形周溝墓等が多数検出された。開港期限の関係から遺跡範囲内全域の調査を完了せずに暫定開通し、その後、大阪府文化財センターが引き継ぎ、現在も調査が進められている。

やや遅れて道路の西に位置する双子池の改修工事（オアシス総合整備事業）が計画され、平成7年度より大阪府教育委員会が泉南市教育委員会の協力を得て双子下池の調査を開始することになった。平成7年12月に試掘調査を行い、双子下池の中央部以外の堤と堤の内側部分は良好な遺物包含層の存在することが明らかとなり、工事予定範囲全域が発掘調査の対象地区となった。平成8年1月から池の中央を東西に横断する道路に近い西堤の裾部分で幅7m、延長78m、546平方メートルを調査し、弥生時代後期から古墳時代初頭から飛鳥時代の遺物を大量に出土するとともに両時代の河道を検出した。平成8年度は西堤北半部と北堤で幅6m、延長170m、1000平方メートルを調査し、弥生時代後期～古墳時代前期の土器を対象に出土し、同時代の溝や堰を伴う飛鳥時代から奈良時代の流路を検出した。同時に平成7年度調査区の南で中央を横断する道路に接した部分を30平方メートル調査した。平成9年度は北堤と東堤のコーナー一部で幅6m、延長100m、600平方メートルを調査し、平成8年度に検出した弥生時代後期～古墳時代前期の溝や飛鳥時代から奈良時代の流路の続きを検出した。平成10年度は東堤の中央部で幅6m、延長55m、約300平方メートルを調査し、大量の土器を含む弥生時代中期の流路や古墳時代初頭の流路を検出した。これまで弥生時代後期が多かったが、ようやく中期の土器がまとめて出土した。平成11年度に東堤で幅4m、延長25m、100平方メートルを調査し、古墳時代初頭の掘立柱建物や井戸を検出し、下池部分の調査を終了した。これまでの調査では遺物は大量に出土するが、検出した遺構のほとんどが流路であった。そのため、人間の生活が見えにくかったのであるが、建物や井戸を検出したことでようやく人間生活の明確な痕跡が見え始めた。

次いで双子上池の堤体改修工事（ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区）が行われることになり、平



第1図 遺跡の位置



第2図 既往の調査区(左)と調査区に設定したグリッド(右)

成12年度に双子上池において10箇所グリッドを設定し、確認調査を行った。その結果、南・西側ブロック張り堤体を除いた堤体改修工事が行われる範囲のうち、東堤の南半部以外の盛土堤体の大部分が発掘調査の必要範囲であることが明らかになった。平成13年度に西堤の北側部分で幅7m、延長83m、580平方メートルを調査し、縄文時代晩期～弥生時代前期の壺と甕を出土し、弥生時代中期および飛鳥時代の流路と大量の遺物を検出した。弥生時代前期の壺は男里遺跡でもっとも古い弥生土器と考えられるものである。流路は下池部分の調査で検出した流路に続くものと考えられる。平成14年度は東堤の南半部で幅5m、延長80m、400平方メートルを調査し、奈良時代の流路を検出した。

平成14年度までに双子池の改修工事に伴う発掘調査だけでも従来の男里遺跡の見解を大幅に変えざるを得ない成果をあげたが、それ以外にも泉南市教育委員会を中心に大阪府文化財協会・大阪府文化財センター・大阪府教育委員会が調査を積み重ね、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代中～晩期の遺物の出土、縄文時代晩期の遺構の検出、弥生時代前期の土器の出土等集落の初現が古く遡っていくとともに古墳時代の竪穴住居・溝・流路、古代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・流路、中世の掘立柱建物等各時代の遺構や遺物がかなり出揃ってきた。そのおかげで各時代の集落域の特定や土地利用がかなりはっきりとした形で考えられるようになり、遺跡の内容が次第に明確になってきた。

今年度は東堤の北半部で幅5m、延長80m、400平方メートルを調査し、双子上池の調査は完了する。今後、調査結果をまとめ集落の全容を解明する作業に移っていくことになる。(藤澤)

## 第2章 遺跡の環境 (第3・4図、第1表)

遺跡は、泉南市と阪南市との境界である男里川の下流域に位置する。泉南地域の自然地形は、和泉山脈から派生する丘陵、段丘面が海岸線近くまでせまり、沖積地は河川下流域に限られる。以下、男里川流域における遺跡の概要について概観し、次に男里遺跡におけるこれまでの調査成果から各時代における集落分布などをみる。

男里川流域では、明確な遺構が確認されるのは縄文時代後期以降である。

縄文時代中期末から後期初頭の土器が男里遺跡で出土している<sup>(1)</sup>。縄文時代後期後葉の墓塚が向出遺跡で確認されている<sup>(2)</sup>。縄文時代晩期では男里遺跡で谷<sup>(3)</sup>、ビッド<sup>(4)</sup>、向出遺跡で土坑<sup>(5)</sup>が確認されている。

縄文時代晩期から弥生時代前期では、男里遺跡<sup>(6)</sup>、馬川遺跡<sup>(7)</sup>で土器が確認されている。弥生時代中期前葉では、男里遺跡で谷<sup>(8)</sup>が確認されている。弥生時代中期中葉から後葉では、男里遺跡で集落や方形周溝墓<sup>(9)</sup>・木棺墓<sup>(10)</sup>、神光寺跡で方形周溝墓<sup>(11)</sup>が確認されている。弥生時代中期後葉から後期前半では、滑瀬遺跡<sup>(12)</sup>と向山遺跡<sup>(13)</sup>で集落が確認されている。弥生時代後期後半では、向出遺跡<sup>(14)</sup>で集落が確認されている。林昌寺裏山で扁平鈕式銅鐸がみついている<sup>(15)</sup>。



第3図 周辺の主な遺跡

庄内式併行期から布留式期前半では、男里遺跡<sup>(6)</sup>で流路が確認されている。庄内式併行期から布留式期では、尾崎海岸遺跡で製塩炉が確認されている<sup>(7)</sup>。布留式期後半では、向出遺跡<sup>(8)</sup>で集落が確認されている。古墳時代中期では、向山遺跡<sup>(9)</sup>で集落が確認されている。古墳時代後期では、前方後円墳である箱作古墳<sup>(10)</sup>、向山遺跡<sup>(11)</sup>で小石室、貝掛遺跡で土坑<sup>(12)</sup>、塚谷古墳群<sup>(13)</sup>、玉田山古墳群<sup>(14)</sup>、高田山古墳群<sup>(15)</sup>のほか、亀川遺跡<sup>(16)</sup>と男里遺跡<sup>(17)</sup>で集落が確認されている。このうち、亀川遺跡では滑石製品が多量に出土している。

飛鳥時代から奈良時代では、男里遺跡<sup>(18)</sup>、貝掛遺跡<sup>(19)</sup>、波有手遺跡<sup>(20)</sup>、箱作今池遺跡<sup>(21)</sup>、田山遺跡<sup>(22)</sup>で集落が確認されている。このほか、男里遺跡でしがらみ<sup>(23)</sup>や玉田山須志器窯<sup>(24)</sup>が確認されている。このうち貝掛遺跡では奈良三彩、田山遺跡では円面硯<sup>(25)</sup>が出土している。

平安時代では、集落が男里遺跡<sup>(26)</sup>、幡代遺跡<sup>(27)</sup>、向山遺跡<sup>(28)</sup>で確認されている。鎌倉時代では、集落が男里遺跡<sup>(29)</sup>、幡代遺跡<sup>(30)</sup>、向山遺跡<sup>(31)</sup>、戎畑遺跡<sup>(32)</sup>で確認されている。室町時代では、集落が幡代遺跡<sup>(33)</sup>と向山遺跡<sup>(34)</sup>で、岡中遺跡で土坑墓など<sup>(35)</sup>のほか、井山城<sup>(36)</sup>が確認されている。中世寺院は、男里遺跡の範囲内で安養寺<sup>(37)</sup>と光平寺跡<sup>(38)</sup>、岡中遺跡東側で林昌寺<sup>(39)</sup>、山中川右岸で長楽寺（平野寺）<sup>(40)</sup>の存在が想定されている。

次に男里遺跡における既往の調査を概観する。以下の本文、第4図、第1表における調査区の表記は、平成12年度までの成果をまとめたもの<sup>(5)</sup>に準拠している。第4図は平成15年度までの調査区の位置を示し、第1表は平成13年度から平成15年度まで行われた調査のうち遺構もしくは遺物が確認された調査区をあげている。なお、平成15年度に（財）大阪府文化財センターによる調査（セ15）が行われているが、以下はその成果を含まない。

男里遺跡における平成12年度から平成15年度までに行われた調査で、遺構もしくは遺物が確認された調査区は以下のとおりである。

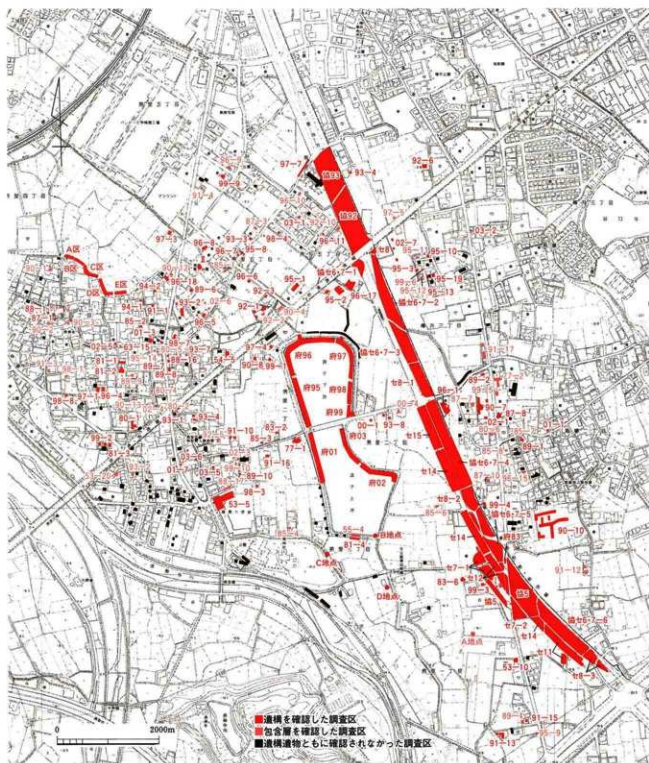
01-3では10世紀代に埋没した谷、03-1では縄文時代の流路が確認されている。

セ14では、弥生時代中期末の竪穴住居と大溝が確認されている。また、奈良時代の遺物が出土しており当該時期の遺構の存在が指摘されている。

府01では、滋賀里Ⅳ式、長原式、弥生時代前期の土器が出土し、その上面が弥生時代前期の遺構面である可能性が想定できる。なお、縄文時代晩期および弥生時代前期の土器は、層的に新旧関係が把握できる資料であるが、時期差につながるとは考えにくく、共存関係として捉えた方が理解しやすい。また、弥生時代後期後半から末、7世紀後半頃の流路が確認されている。府95・96で確認した流路と時期的に連続するもので、77-1で確認された集落の時期を想定できる資料といえる。

府02では、弥生時代中期、弥生時代後期、奈良時代初頭の流路と、奈良時代初頭の遺物を含む不明土坑、おそらく14世紀代以降のものと考えられる耕作痕が確認されている。また、17世紀以降20世紀初頭までに限られる双子上池堤体に伴う「はしご土台」状の構造をもつ「ノリ止め（基礎）」と考えられる溝が確認されている。





第4図 男里遺跡における既往の調査

以上の資料をふまえて男里遺跡における各時期の状況についてみてみたい。

ナイフ形石器（府95）や縄文時代後期の土器（セ12）が出土しているが、明確な遺構が確認されているのは、縄文時代晩期以降である。

縄文時代晩期では、長原式期（95-1）におけるピットが確認されている。このほか、流路・谷がⅡ、府01、96-7、99-9、03-1、E区で確認されており、このうち遺物の出土量からⅡ、E区で滋賀里Ⅲ・Ⅳ式の集落域の存在が想定できる。浮線網状文浅鉢（95-1）が1点出土して

第1表 平成12年度以降の調査成果

遺構	地区	出土遺物	遺構の年代	註	遺構	遺構			(頁)
						ビット	03-2	-	
	ビット	01-1	-	(52)	耕作痕	03-5	-	中世以降	(54)
	谷	01-3	黒色土器A類	10世紀	(52)	竪穴住居	セ14	弥生土器 弥生時代中期	(56)
	溝	02-1	土師器	-	(53)	大溝	セ14	弥生土器 弥生時代中期末	(55)
	柱穴	02-5	-	近代	(53)	地区	出土遺物	年代	(註)
	耕作痕	02-7	-	中世以降	(53)	02-4	瓦器	12世紀後半	(33)
	ビット	02-7	-	中世以前	(53)	02-6	土師器	-	(53)
	旧河道	03-1	土師器・縄文土器	縄文時代以降	(54)	セ14	-	奈良時代	(55)

いるほか、河内の胎土をもつ土器が一定量みられる(95-1、E区、Ⅱ)。また、破損した石棒が2点出土している(E区)。

長原式と弥生時代前期の土器が同一の調査区で出土している(府01)。集落域の存在が想定でき、しかも縄文時代晩期から弥生時代前期の集落域は近接して存在している可能性が考えられる。

弥生時代前期、中期前葉、中期後葉、後期後半から末で集落域が異なる。前期のものは双子上池の東西両岸(府01・03)、中期前葉のものは現男里集落の北東縁辺(E区)、中期後葉のものは遺跡南東部(セ12など)、V様式後半から末は遺跡中央の双子上池の東西両岸(府95・96・98・99・01・02)にそれぞれ集落域が確認もしくは想定される。

中期後葉の方形周溝墓(協セ6・7-4、セ11)と木棺墓(府85)確認されている。また、中期後葉の集落域を画する大溝がみついている(セ7-1、セ7-2、セ12)。

庄内式併行期と考えられるビット(府99)や本調査区で竪穴住居が確認されている。また、弥生時代後期末から布留式期の流路が双子上池で確認されている(府95・96・01・02・03)。このうち、府95・96では庄内式および布留式の甕が出土している。

古墳時代では、後期の集落域が現在の男里集落北東縁辺(B・C・D・E区)で確認されている。なお、この時期の土器製塩活動の痕跡は皆無である。

飛鳥時代から奈良時代にかけての集落域が96-1・77-1で確認されている。包含層や遺構の分布(53-5、89-10、00-4)からおおよその両集落の範囲をつかむことができる。この他、遺跡北西部でも集落域の存在が想定できる(Ⅱ)。上記の調査区では製塩土器、漁労具などのほか、土馬も出土している(府95・96、96-1)。窯体片や焼けひずみのみられる須恵器が出土している(府95)。府96で「しがらみ」が確認されている。墨書土器が2点出土している(府95)。

奈良時代から中世にかけての集落の存続期間には、3つのパターンがみられる。奈良時代から平安時代まで、平安時代のみ、平安時代末から室町時代ごろである。奈良時代から平安時代まで双子上池西側において集落(77-1)が営まれ、これにややおくれて遺跡北東(協93、95-2)で集落があらたに出現する。さらに、平安時代末からあらたな集落域が出現する。ひとつは、現在の男里集落の北東縁辺(B・C・D区)および西部(80-1)、もうひとつは遺跡の南東(90-10、セ8-2)である。また、この時期の寺院跡の存在が想定されており、前述の両集落に対応する可能性が指摘できる。位階関係から前者には光平寺、後者には安楽寺が対応すると考えられる。

上記の両集落は異なる生業をもつ集団であった可能性が指摘できる。遺跡北西部の集落域において鎌倉時代頃の真蛸壺焼成土坑、土錘などの漁撈に関わる遺物が多いが、遺跡南東の集落域では漁撈具の出土量は少ない。両者は主たる生業の異なる集団であったとも考えられる。以上を勘案すると平安時代末以降に形成されたふたつの集落域は、鎌倉時代以降には寺院、生業などが互いに異なることから、ある一定社会的に独立した存在であったことが想定できる。(河田)

作釈 (1) (財) 大阪府文化財調査研究センター2001『男里遺跡発掘調査資料集』

(2) (財) 大阪府文化財調査研究センター2000『向出遺跡発掘調査報告書』

(3) 泉南市教育委員会2002『市道改良に伴う男里遺跡発掘調査報告書』

(4) 泉南市教育委員会1996『96-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』

(5) (2)と同じ。

(6) 大阪府教育委員会2002『男里遺跡発掘調査概要・VI』・泉南市教育委員会1995『男里遺跡・I』、『泉南市文化財年報No.1』

(7) 泉南市教育委員会2000『馬川遺跡98-1区』『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要XV』

(8) (3)と同じ。

(9) (財) 大阪府文化財調査研究センター2001『男里遺跡発掘調査資料集』

(10) 堀田啓一1987『原始の泉南』、『泉南市史 通史編』泉南市史編纂委員会

(11) 阪南町教育委員会1982『神光寺跡発掘調査報告書』

(12) (財) 大阪府埋蔵文化財協会1987『香取遺跡発掘調査報告書』

(13) (財) 大阪府文化財調査研究センター2002『向山遺跡発掘調査報告書』

(14) (2)と同じ。

(15) (10)と同じ。

(16) 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・I』・大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・II』

(17) 泉南市教育委員会1997『尾崎海岸遺跡90-1区』『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要XII』

(18) (2)と同じ。

(19) (13)と同じ。

(20) 広瀬和雄・松村隆文1992『和泉』、『前方後円墳集 近畿編』山川出版社

(21) (13)と同じ。

(22) 泉南市教育委員会1998『貝掛遺跡II』

(23) 西山俊一1980『淡輪磯山古墳群』摂河泉文庫

(24) (23)と同じ。

(25) (10)と同じ。

(26) (財) 大阪府文化財調査研究センター2002『亀川遺跡発掘調査報告書』

(27) (3)と同じ。

(28) 泉南市教育委員会1997『96-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』・泉南市教育委員会1978『男里遺跡発掘調査報告書』

(29) (22)と同じ。

(30) 泉南市教育委員会1995『波有手遺跡』

(31) 泉南市教育委員会1998『船作今池遺跡97-3区』『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要 XIII』

(32) 泉南市教育委員会2001『歴史の環境』『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要 XIV』

(33) 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・II』

(34) 大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

(35) (財) 大阪府埋蔵文化財協会1994『男里遺跡発掘調査報告書』

(36) (32)と同じ。

(37) 泉南市教育委員会1995『韓代遺跡』『泉南市文化財年報No.1』

(38) (13)と同じ。

(39) (財) 大阪府文化財調査研究センター2001『男里遺跡発掘調査資料集』

泉南市教育委員会2002『市道改良に伴う男里遺跡発掘調査報告書』

(40) 橋本 哲1994『韓代遺跡』『大阪府埋蔵文化財研究会 (第30回) 資料』(財) 大阪文化財センター

泉南市教育委員会2004『新伝寺遺跡91-1区・韓代遺跡03-3区発掘調査報告書』

(41) (13)と同じ。

(42) 城野博文1997『泉南市成瀬遺跡の調査』『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集』(財) 大阪府文化財調査研究センター

(43) 橋本 哲1994『韓代遺跡』『大阪府埋蔵文化財研究会 (第30回) 資料』(財) 大阪文化財センター

(44) (13)と同じ。

(45) 1987年度の泉南市教育委員会の調査。

(46) (財) 大阪府埋蔵文化財協会1988『井山城跡』

(47) (1)と同じ。

(48) 堀田啓一1987『古代の泉南』、『泉南市史 通史編』

(49) (8)と同じ。

(50) 山本芳三『大坂地域の平安時代光輝瓦の標榜』『第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の標榜-11・12世紀の寺院の考古学的研究-』摂河泉文庫

(51) 大阪府教育委員会2002『既往の調査』『男里遺跡発掘調査概要・I』

第4図に掲載している平成12年度以前の調査区の概要については、上記の標榜を参照のこと。

(52) 泉南市教育委員会2002『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIX』

(53) 泉南市教育委員会2003『泉南市遺跡群発掘調査報告書XX』

(54) 泉南市教育委員会2004『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXI』

(55) (財) 大阪府文化財センター 2003『財団法人 大阪府文化財センター年報 平成14年度』

### 第3章 調査成果

#### 第1節 基本層序（第5・6・7図、図版1）

調査区は現在の双子上池堤体の内法に平行に設定している。現地表面の直下は、東半分が堤体盛土で西半分が池底のヘドロ状の堆積土となる。これらを除去すると、双子池構築以前の層位にいたる。

今回の調査では、双子池構築以後の層位を機械掘削により除去し、それより下層位を人力掘削の対象とした。

なお、双子池堤体構築に伴い旧地形が影響を受けていることがわかる。調査区東側断面をみると、堤体盛土と堤体構築以前の旧地形であるI層および流路1の境界で、不自然な凹凸が観察される（第6図B-C間断面）。このことから、堤体盛土は構築当初かもしくは改修時に旧地形を掘り込んで施されていると考えられる。

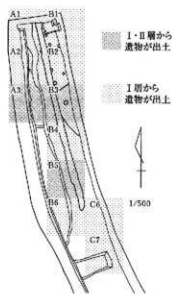
以下、双子池構築以前の層位と遺構及び遺物について概観する。

**I層** 暗茶褐色から黒褐色系のシルト。調査区に設定したグリットではA1～3、B1～6、C6・7においてのみ確認される層位である（第5図）。遺物が出土しているが、出土量が少なく、いずれも小片で時期は不明である。自然堆積によるもので、湿地状であったことを示すものと考えられる。同様の層位は、双子池の東西兩岸付近の調査で確認されていることから、本来、付近に均一に堆積していたものと考えられる。双子池堤体改修に伴う調査では部分的にしか確認されていないことから、双子池構築とその後の堤体改修及び用水の浸食作用により、現在では一部にしか遺存していないものと考えられる。

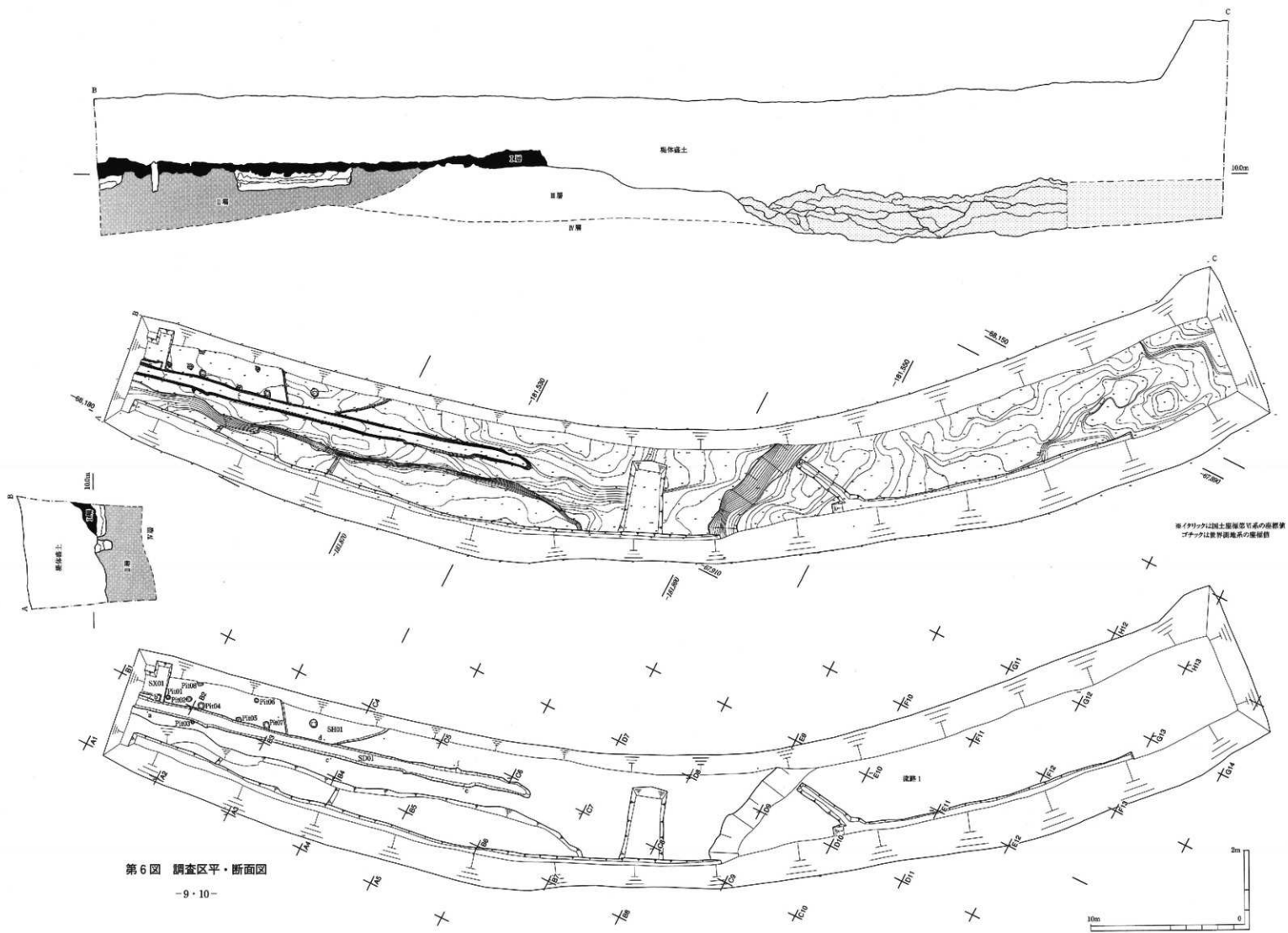
I層上面で遺構が確認されている。調査区東側断面（第6図）をみると、Pit08はI層上面が遺構面であることがわかる。また前述したとおり、堤体構築に伴いI層が影響を受けていることが想定されることから、遺構が削平されている可能性も考えられる。

I層直下でSD01、流路1、SH01、SX01などの遺構を検出した。ただ、I層が堤体構築などにより影響を受け部分的にしか遺存していないことから、I層直下が遺構面と確認できるものはSH01とSX01およびI層が確認できたグリット内で検出したピットである。

**II層** 黄褐色系のシルトで、ごく一部礫混じりの粗砂がみられる箇所がある。上面はT.P.+10.0m前後。調査区の北半においてのみ確認された層位である。II層上面のコンターをみると、西側に向かってレベルを下げている。調査区北側断面（A-B間断面・第6図および図版1）をみると、黄褐色のシルト直下の礫混じり粗砂が西側にレベルを下げている。II層上面の比高差は双子池構築による削平および用水による侵食の影響もあろうが、本来の地形をある一定反映しているものと考えられる。

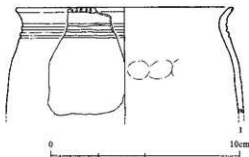


第5図 I・II層の遺物出土状況



A3およびB3・5においてのみ遺物が出土している。なお、遺物が出土した付近では焼土が確認された。

Iは弥生土器である。口縁端部に刻目、頸部直下に三条の沈線がめぐる。摩耗のため調整が確認しづらいが、体部内面には指頭痕、外面にはナデがのこる。3mmほどの白・茶・灰色の砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色である。



第7図 II層出土遺物

II層は、出土遺物の時期や土質が類似することから双子上池西側堤体における調査（府01）で確認した同時期の層位（6層）と同一の層位と考えられる。両者の堆積状況から、弥生時代前期以前の流路が双子池のほぼ中央に位置すると考えられる。なお、同時期の流路は、下流側では99-9・96-7・03-1で、上流では幡代南遺跡で確認されている<sup>(1)</sup>。

III層 灰色から黄橙色の粗砂からなり、一部に20cm以下の礫が混じる。調査区中央に分布し、上面が流路1の検出面となる。調査では、一部掘削したが遺物は出土していない。

IV層 明青灰色粘土および粗砂に20cm以下の礫が混じる。調査区全体に分布し、過去の双子上池（府01・02）における調査でも確認されている層位である。いずれの調査区においても遺物は確認されていない。地山と考えてよい。

## 第2節 遺構と遺物

調査では、I層上面でPit08、II・III層上面でSD01、Pit01～07、流路1、SH01、SX01を検出した。以下、各遺構についてふれることとする。

### 1. ビット（第6・8図、図版1・4）

Pit01～07はII層上面で、Pit08はI層上面で検出した。いずれも径30cm前後で深さ約30cm、柱痕はない。調査区内では平面的な分布から掘立柱建物とはして認識できるものはなかった。このうち、Pit04・05・07は切り合い関係からSD01より古い遺構であることがわかる。

Pit07から、土師器鍋（2）が出土している。口縁部はヨコナデ、体部外面にはハケメ、内面には板状工具によるナデがみられる。8世紀初頭か。

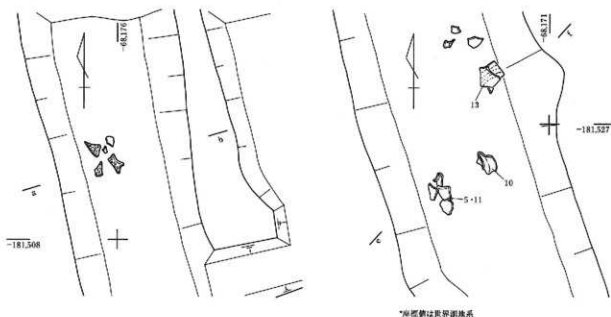
### 2. SD01（第6・9図、図版1・4・5）

最大幅約60cm、深さ約40cm、検出長約30m。I層直下で検出した。遺構南端は途切れているが、遺構底面のコンターと遺構の深さが南側ほど浅いことから、本来はさらに南側に伸びていたものが、堤体構築により削平されたものと推測できる。なお、I層掘削中にSD01付近で遺物が集中して出土した。I層上面が遺構面である可能性も考えられる。

埋土は2層に分層できる。上層は褐色灰色シルトで最下層にはラミナがみられる。遺構底面のレベル差と埋土の堆



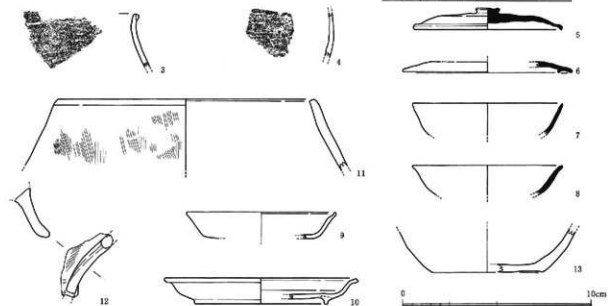
第8図 Pit07出土遺物



\*南側壁は長原国地系



1. 10YR 4/1 黄灰色シルト
2. 10YR 4/1 黄灰色シルトに10YR 6/2 灰黄色緑砂が混入している
3. 10YR 6/6 黄褐色シルト (遺層)



第9図 SD01遺物出土状況・断面図・出土遺物

積状況から、SD01は水路と考えられる。

遺物は最上層から出土しており、縄文土器深鉢、須恵器蓋坏・高坏、土師器坏・甕、瓦質土器が出土している。

3・4は縄文土器深鉢である。3は口縁端部に刻目をほどこした断面三角形の突帯がとりつく。長原式か。4は摩耗のため調整不明。いずれも生駒西麓の胎土である。

5～7は須恵器蓋坏である。5は口径15.6cm、器高2.4cm。6は口径17.8cm。7は口径15.9cm。8は須恵器高坏である。口径15.9cm。

9は土師器杯である。口径15.6cm、器高2.8cm。10は土師器皿である。口径20cm、器高2.8cm。11・12は土師器移動式竈である。11は口径27cm。外面はハケメ、内面は一部にハケメがのこる。12は、底である。竈本体から剥離したもので、ハケメで端部にはナデがみられる。おおむね8世紀初頭であろうか。

13は、瓦質土器である。体部内面に粘土製の痕跡がのこる。器種は不明。中世のものか。

以上、SD01から出土した遺物には縄文時代晩期、8世紀初頭、中世と時期差がかなりある。出土遺物の大半は8世紀初頭の遺物である。出土状況は8世紀初頭のもの(5・10・11)と中世のもの(13)が近接して検出されている(第9図・図版4)。遺物はいずれも埋土の上層から出土したもので、SD01が水路であるならば、廃絶した後の埋土から出土していることとなる。I層の年代が明確でないことと、遺構面が断面で確認できなかったことから、遺構の埋没年代は確定できない。

### 3. 流路1(第6・10~14図、図版1・2・5・6)

幅約10m以上で、府02で確認した流路1と同一の遺構である。南東から北西に流れる自然流路で、出土遺物の時期から3層に分層できる。

1層は、橙色から灰色の細砂から粗砂、黒色粘質シルトからなり、一部に木葉や流木などの有機物のほか20cm以下の礫を含む。平面分布は、流路1を検出した範囲全体に分布している。上面が堤体盛上および池底ドロであるが、不自然な凹凸が確認できることから両者により削平もしくは侵食を受けていることがわかる。遺物の出土状況に偏りはあまりない。

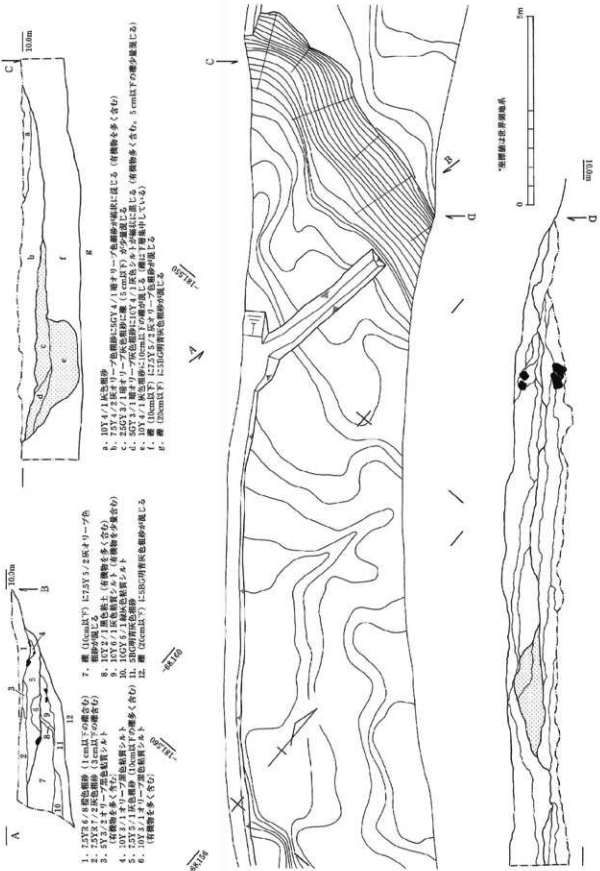
須恵器蓋杯・高杯・壺・壺・横瓶・提瓶・甕、土師器甕・皿・杯・高杯、砥石が出土している。

14~19は須恵器杯蓋である。14・15は天井部外面にヘラ記号がみられる。14は口径11.2cm、器高4cm。15は口径11.6cm、器高3.8cm。16・17は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。16は口径11.2cm、器高3.6cm。17は口径11.8cm、器高3.4cm。18は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口径10.2cm、器高3.6cm。19は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口径16.2cm。

20~28は須恵器杯身である。20は底部外面に回転ヘラケズリを施す口径9.8cm、器高3.0cm。21は底部外面にヘラ記号がみられる。口径10.8cm、器高3.6cm。22は底部外面をナデで仕上げる。口径10.4cm、器高3.6cm。23は底部外面をナデで仕上げ、一部に円形の圧痕がみられる。口径8.6cm、器高3.4cm。24は底部外面を粗い回転ヘラケズリで仕上げる。口径10.2cm、器高4cm。25は底部外面をナデで仕上げる。口径12.0cm、器高4cm。26は底部外面を粗いナデで仕上げる。口径9.4cm、器高3.2cm。27は底部外面をナデで仕上げる。口径11.8cm、器高3.6cm。28は口径16.8cm、器高3.8cm。

29は須恵器高杯である。内外面とも回転ナデ、脚径8.4cm。30は須恵器壺である。口縁部下の屈曲部に弱い凹線をもつ。口径12.8cm。31は須恵器壺である。口径8.4cm。内外面とも自然釉が付着している。32は須恵器提瓶である。体部内面は回転ナデで一部にナデ、体部外面はタタキのあとにカキメを施しており、製作過程がみてとれる。ヘラ記号がみられる。胴部最大径17.2cm。33は

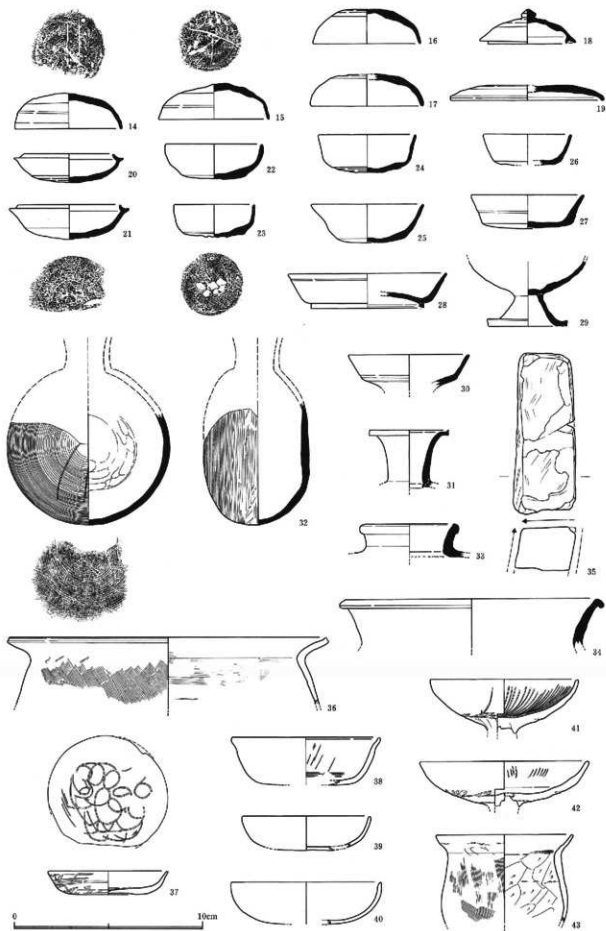




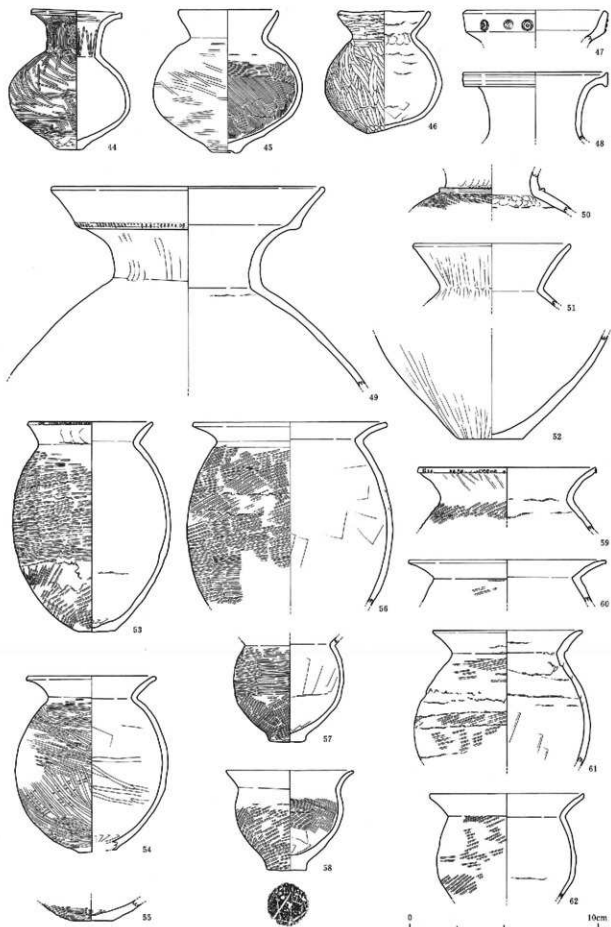
- 1. 2.5X2.8/8 灰色粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 2. 5X3.2/2 ナーア層粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 3. 5X3.2/2 ナーア層粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 4. (有機物を多く含む)
- 5. 10X2.1/1 灰色粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 6. 10X3.1/1 ナーア層粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 7. 層 (10cm以下) に2.5X2.8/8 ナーア層粗砂
- 8. 10X2.1/1 灰色粗砂 (有機物を多く含む)
- 9. 10X2.1/1 灰色粗砂 (有機物を少量含む)
- 10. 10X3.1/1 灰色粗砂 (有機物を少量含む)
- 11. 10X2.1/1 灰色粗砂 (有機物を少量含む)
- 12. 層 (10cm以下) に3.0X3.0/3 ナーア層粗砂が混じる

- 8. 10X4.7/1 灰色粗砂
- 9. 2.5X3.1/1 ナーア層粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 10. 2.5X3.1/1 ナーア層粗砂 (1cm以下)の割合含む
- 11. 10X4.7/1 灰色粗砂 (有機物を多く含む)
- 12. 層 (10cm以下) に2.5X2.8/8 ナーア層粗砂が混じる
- 13. 層 (20cm以下) に3.0X3.0/3 ナーア層粗砂が混じる

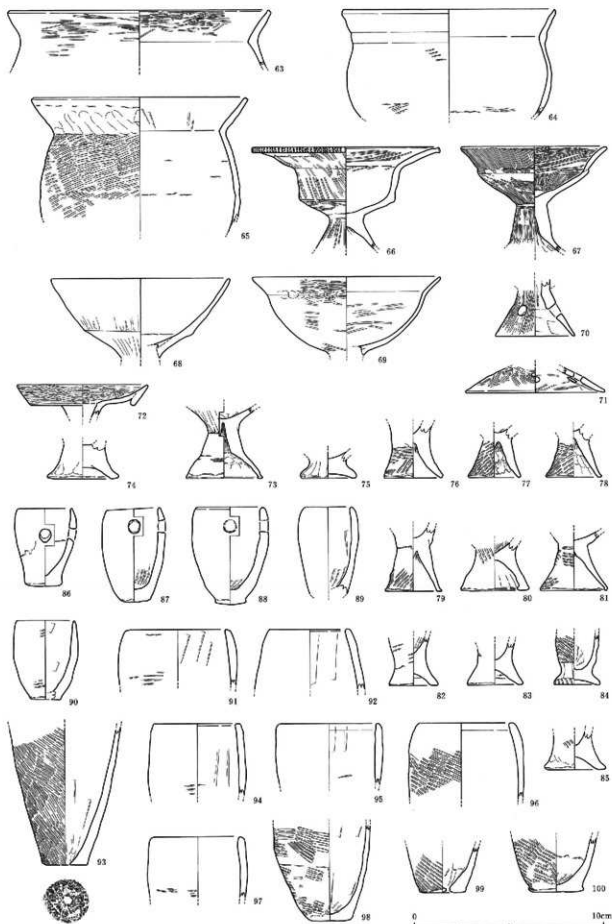
第10図 流路1平・断面図



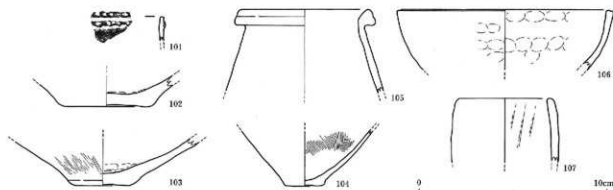
第11図 流路1 1層出土遺物



第12図 流路1 2層出土遺物-1



第13圖 流路1 2層出土遺物-2



第14図 流路1 3層出土遺物

須恵器横瓶である。体部内面にあて具痕がのこる。口径9.4cm。34は須恵器甕である。口径26.6cm。

35は砥石である。砂岩製で、一部に被熱し赤変している箇所がある。

36・43は土師器甕である。36は内面の口縁部下半から体部にかけて横方向のハケメがみられる。口径33.6cm。43は体部内面をヘラケズリで仕上げる。口径14.4cm。

37～40は土師器坏である。37は底部外面に横方向のヘラケズリののち不定方向のヘラミガキで仕上げる。口径12.6cm、器高2.4cm。38は内面をヘラミガキで仕上げる。口径15.6cm、器高5cm。39・40は内外面ともナデで仕上げる。39は口径13.4cm、器高3.6cm。40は口径15.8cm、器高4.6cm。

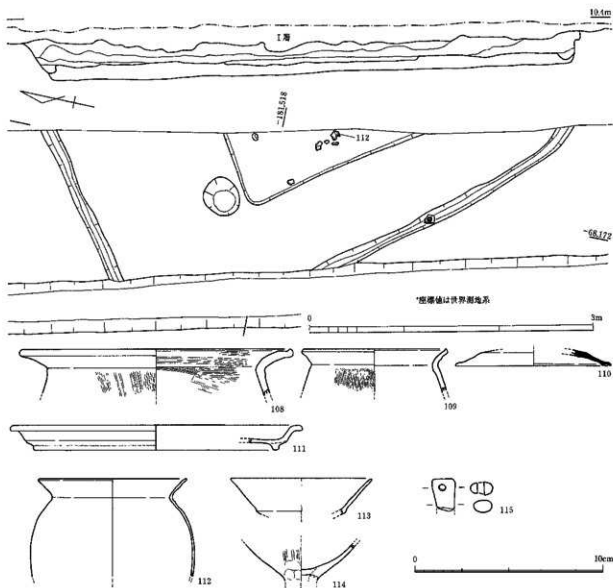
41・42は土師器高坏である。いずれも脚部と坏部の境目に、成形時のヘラ状工具による痕跡がのこる。脚柱部は41が縦方向のつよいナデ、42はナデで仕上げる。脚中部にはいずれも底面から粘土塊を充填した痕跡がみられる。41は坏部内外面をヘラミガキ、42は内面のみヘラミガキで仕上げる。41は口径15.6cm、坏部高4cm。42は口径17.8cm、坏部高3.4cm。

以上の出土遺物から1層は、おおむね8世紀初頭であろうか。

2層は、灰色系の粗砂と粘質シルトからなり、有機物を多く含む。平面分布は流路1のうちごく一部の範囲、E10付近においてのみ分布している。調査区東西の断面から流路の規模を復元すると幅5m、深さ1.5m程で、1・3層の時期の流路に比べ極端に狭く深い。断面の堆積状況を見ると、1・3層に比べやや不自然な印象を受ける。人為的に掘削された可能性も考えられる。

44～52は甕である。44は調査区西側断面e層（第10図）から出土した。体部内面をナデで仕上げる。45は体部上半と口縁部内外面をナデ、体部外面はヘラミガキで仕上げる。46は体部内面下半に板状工具によるナデ。口縁部および体部上半の内面はナデで、一部に接合痕がのこる。47は屈曲した口縁部外面に円形浮文がみられる。48は磨耗のため調整不明。49は屈曲する口縁部外面に刻目がみられる。頸部には縦方向のヘラミガキがみられるが、そのほかは磨耗のため調整不明。50は体部と頸部の境目に上面にキザミメをもつ突帯がみられる。頸部内外面はナデ、体部内面は指頭痕がのこる。51・52は内面は磨耗のため調整不明。

53～62・65は甕である。器高はおおむね10cm程度（57・58）、20cm程度（53・54）、20cm以上（56・65）に分かれる。キザミメを施すもの（53・59）や、体部外面をヘラミガキで仕上げるものがある（54）。61は茶褐色の胎土で、そのほかの個体とは異なった色調を呈する。



第15図 SH01平・断面図・出土遺物

63・64は鉢である。63はヘラミガキが緻密で、64は体部外面に一部タタキがのこる。

66～71は高杯である。坏部は碗型のもの(69)、稜線をもつもの(67・68)、稜線をもち外反するもの(66)がある。脚部はおおきくひろくもの(71)とそうでないもの(70)がある。66は口縁端部にキザミメをもつ。66・67は脚柱部内面にシボリ目がみられる。脚裾内面は67・70には板状工具によるナデ、71にはヘラミガキがみられる。68・69は坏部底から脚柱部へ粘土塊を充填した痕跡がみられる。

72は器台である。外面はヘラミガキ、脚中部は内外面ともナデで仕上げる。

73は器種不明。脚部外面はナデで一部にタタキがのこり、体部外面は縦方向のヘラミガキがみられる。

74～85は製塩土器である。脚部と体部に接合痕が観察できるもの(76～82)と、観察できないもの(74・75・83～85)がある。外面をナデで仕上げるもの(74～80・82・83・85)、タタキで仕上げるもの(76・79～81)、ユビオサエで仕上げるもの(74・75・84)がある。79は調査区西

側断面e層（第10図）から出土した。

86～90は飯蛸壺である。体部外面はナデで仕上げられる。いずれも口径8cm前後、器高10cm前後。枝縄を繋ぐ紐穴がみられる個体がある（86～88）。

91～100は真蛸壺である。完形品はないが、口径10cm前後、器高16cm以上であろう。底部に焼成前の穿孔がみられる（93・99）ものとそうでないもの（98・100）がある。

以上の出土遺物から2層は、おおむね庄内式併行期であろうか。

3層は 灰色系のシルトから粗砂に、20cm以下の礫を多く含む。平面分布は、1層と同じく検出した範囲全体に分布している。遺物の出土状況には偏りがある。D9付近やF12付近においてのみ遺物が出土しており、1・2層と比較すると出土量は極度に少ない。

101は縄文土器深鉢である。断面台形の突帯と面をもつ口縁端部に刻目がみられる。生駒西麓の胎土。

102～107は弥生土器である。102～105・107は壺であろうか。内面に指頭痕がのこるもの（102・103）、ハケメがのこるもの（104）がある。105は口縁端部を折り返し下方から粘土塊を充填し凹線状のくぼみがめぐる。摩耗が激しく調整は確認できない。106は鉢であろうか。内外面とも指頭痕がのこる。

以上の出土遺物から3層は、おおむね弥生時代中期であろうか。

#### 4. SH01（第6・15図、図版1・3）

一辺約5m以上の平面方形の堅穴住居である。平面検出の状況から、SD01に一部切られていることがわかる。内部施設は、幅約1～1.5m、高さ約10cmのベット状遺構、柱穴および壁溝を検出した。断面から、遺構底面から20cmほど貼床が施されていることがわかる。拡張などの痕跡は確認できない。柱穴では柱痕は確認されなかった。

108～111は埋土の最上層から出土した。112は床面直上のベット内埋土、113・114は住居内の柱穴埋土から、115は貼床からそれぞれ出土した。

112は甕である。器壁が薄い。磨耗が激しく内外面とも調整は不明である。胎土はにぶい黄褐色である。113・114は高坏である。113は内外面とも磨耗のため調整は不明。114は脚柱部外面に指頭痕、坏部外面に縦方向のヘラミガキがみられる。また、坏部底から脚部へ粘土塊を充填している痕跡がのこる。115は土錘である。

以上の遺物から、SH01の廃絶時期はおおむね庄内式併行期と考えられる。

#### 5. SX01（第6図、図版1・4）

試掘坑と重複しており、一部のみ検出している。検出幅1.5mで、断面（第6図B-C間断面・図版4）から遺構の平面プランを想定すると方形になると考えられる。断面では壁溝は確認できなかったが、堅穴住居の可能性も考えられる。（河田）

注釈 （1）田中一版1994「輪代南遺跡」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第30回）資料』（財）大阪文化財センター  
参考文献

古代の上野研究会編1992『古代の上野 都城の土器集成』  
磯川吉文1990『和泉地域』『弥生土器の様式と編年 畿内編Ⅱ』木耳社

## 第4章 まとめ

まず、今回の調査成果を概観し、さらにこれまでの双子上・下池における調査成果から遺構の変遷をまとめてみたい。なお、調査区が狭小であることから、不明確であった点が多い。以下は、調査成果をもとに推測している箇所がある。

まず今年度の調査成果についてみてみたい。

Pit08は、断面からI層上面が遺構面であることがわかる。それ以外のPitは、断面で遺構面を確認することはできないが、I層の平面分布とSD01に切られていることから、II層上面が遺構面と考えられる。Pit07から、8世紀初頭と考えられる遺物が出土している。これらのことから、Pit08はI層上面が遺構面で8世紀初頭以降のもの、Pit01～07はII層上面が遺構面で8世紀初頭以前のものと考えられる。

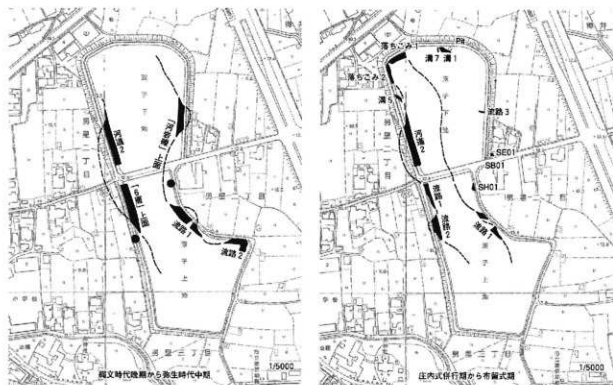
II層上面で検出したSD01は、埋土の状況と遺構底面のレベル差から水路と考えられる。ただ、調査成果から遺構の時期を確定することはできない。出土遺物が縄文時代晩期、8世紀初頭、中世と時期差があること、検出面が認識できなかったこと、検出面直上のI層の年代が明確でないことが理由である。ただ、中世の遺物は8世紀初頭の遺物と近接して検出されていることから、同時に埋没した可能性が高い。また、遺物が出土した埋土が堤体構築に伴う盛土とは明確に異なることとSD01が8世紀初頭の遺物が出土したPit07を切っていることから、大半が8世紀初頭の遺物であるが中世の遺物が混入である可能性は低い。SD01は中世のものとして推測できる。

では、SD01が中世の水路である場合、どのような目的で設置されたものであろうか。SD01は双子池底のコンターとはほぼ平行しているが、その延長線上には双子下池の吐水口と重複する時期不明のSD01(府97)、現在の双子上池の取水口が位置する(第17図右)。現在、双子池は金熊寺川に設けた井堰から水路をとおして貯水し、双子池以北の耕作地の用水をまかなう。つまり、SD01は水路による河川灌漑用の施設として機能しうる立地にあるといえる。なお、双子池構築は17世紀初頭<sup>(1)</sup>であることから、中世には双子池は存在しない。以上、あくまで推測であるが、SD01は双子池構築以前の中世における河川灌漑に伴う水路である可能性を指摘したい。

流路1からは弥生時代中期、庄内式併行期、8世紀初頭の遺物が出土した。流路のベースであるIV層は地山と考えられることから、少なくとも弥生時代中期以降の自然流路を平面的に確認しえたといえる。庄内式併行期のものは、前後の時期のものと同規模や断面形状が異なることから、人為的に掘削された可能性を指摘した。ただし、同一の流路と考えられる前年度の調査(府02)で確認した流路1は、庄内式併行期の遺物が出土しているものの、今年度の調査で確認したような人為的に掘削された可能性を示唆する状況ではない。このことから、府02および今年度の調査で確認した流路1は庄内式併行期において、別の遺構である可能性も考えられる。つまり、平成14年度の調査で確認した流路1は自然流路で、今年度の調査で確認した流路1は自然流路から分流する人為的な溝と推測できる。

SH01は、庄内式併行期の竅穴住居である。遺跡内では、はじめて検出されたもので、双子池





第16図 双子池における遺構の変遷-1

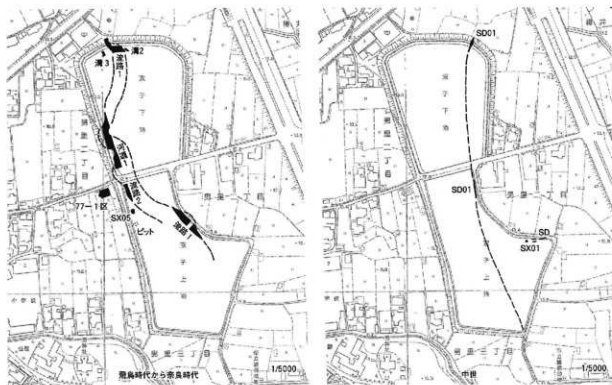
東側に当該時期の集落が存在していることが明確になった。また、SX01は壁溝などの内部構造は確認できなかったが、同時期の竪穴住居なのかもしれない。

上記の遺構の検出面であるⅡ層から、弥生時代前期の甕が出土した。Ⅱ層は土層断面から南東から北西へレベルを下げる層位であることがわかる。弥生時代前期の甕が出土した付近では、焼土塊がみついている。この状況は一昨年度の調査（府01）で同時期の遺物が出土した「6層」と類似する。両者は同時期の層位であり、双子池にむかってレベルを下げることから、当該時期に双子池に重複するように自然流路があり、その東西両岸に縄文時代晩期から弥生時代前期の集落が存在している可能性が指摘できる。

以下はこれまでの調査で確認した各遺構の関連性や変遷を想定しまとめとしたい。

縄文時代晩期から弥生時代中期 縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が、府01の「6層」と今年度の調査における「Ⅱ層」から出土している。いずれも双子池にむかって斜面堆積を呈することから、自然流路が存在するのであろう。現在確認されている最も古い自然流路は、府01の「6層」上面、府02の「流路2」、府03の「流路1」、府98の「河岸礫」上面で、いずれも弥生時代中期のものである。これに庄内式併行期以前のものである府95の「河道2」と府02の「流路1」を加えると、第16図左側のように想定できる。また、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が確認されている箇所（図上の●）周辺に当該時期の集落の存在が想定できる。

庄内式併行期から布留式期 おそらく同一の自然流路と考えられるのは、府01の「流路1」と「流路2」、府02の「流路1」、府95の「河道2」、府96の「落ちこみ1」「落ちこみ2」であろう。府96の「落ちこみ2」の西側は、調査では掘削していないので、この時期の流路西岸はさらに広



第17図 双子池における遺構の変遷—2

がる可能性がある。この自然流路に府96の「溝5」「溝7」「溝1」、府98の「流路3」、本調査区の「流路1」のいずれかが支流のように取りつくのであろうか。府96の「溝5」、本調査区の「流路1」、府98の「流路3」などはその可能性が高い。また、本調査区でSH01、府99で「SB01」が確認されており、府98の「流路3」付近まで集落域の広がりが想定できる。遺物がまがまって出土した府96の「溝1」西側には、時期不明の「Pit」があることから、この周辺にも集落の存在するのかもしれない。

飛鳥時代から奈良時代 府02と本調査区の「流路1」、府01の「流路2」、府95の「河道1」、府96の「流路1」が同一の自然流路で、府96では「しがらみ」が確認されている。府96の「溝2」は「しがらみ」に伴う溝とされるが、「溝3」もその配置から同様の機能をもつ溝である可能性が指摘できる。府01の「SX05」、時期不明である府01の「ピット」もこの時期の遺構である可能性が指摘できる。77-1周辺の自然流路西岸に集落域があり、その上流の東岸（府02・03）でも遺物が多量に出土することから、複数の集落域があったことがわかる。

中世 この時期の自然流路はいずれの調査区でも確認されていないことから、前代の自然流路は埋没し、周囲は湿地状であったと考えられる。本調査区の「I層」は、この時期のものなのかもしれない。堤体構築以前の層位から、府96では13世紀後半、府02では14世紀の遺物が確認されている。本調査区の「SD01」、府97の「SD01」は同一の灌漑水路と推測できる。府02で14世紀以降の耕作痕と考えられる「SD」、灌漑用の井戸と考えられる「SX01」が確認されていることから、一部耕地化されていたことが想定できる。（河田）

注釈 (1) 谷 美光1989「寛政四年水浪の奥書」【おのさと】第2集

## 報告書抄録

ふりがな	おのさといせきはつくつちようさがいよう							
書名	男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ							
副書名	府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区(双子上池)に伴う							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高島 徹・藤澤真依・河田泰之							
発行機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 1a.06 (6941) 0351							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさといせき 男里遺跡	おおさかみなみなんし 大阪府泉南市 おのさと 男里	27228	12	34° 21' 30"	135° 15' 40"	2003年10月 ? 2004年3月	400	堤体改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡	集落	弥生時代中期～ 後期、古墳時代前 期、飛鳥・奈良時 代  古墳時代前期	流路  SH01  SD01	弥生土器・須恵器・ 土師器  土師器  須恵器・土師器		男里川の旧河道  竪穴住居  溝		

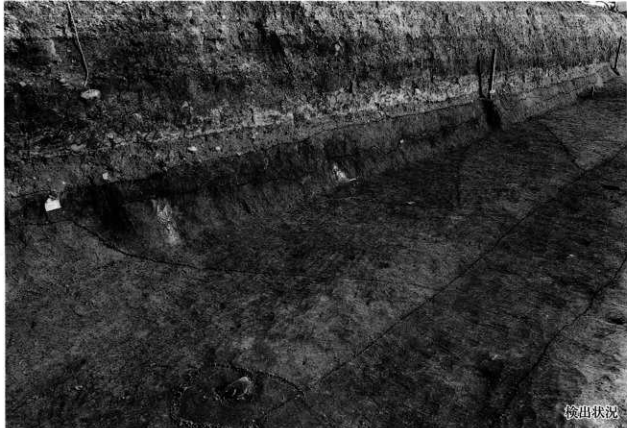
# 図版

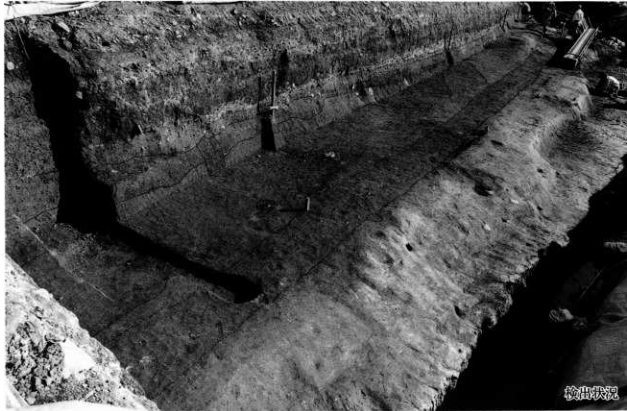


調査区全景（上が北）













1



5



11



10



13



14



18



22



27



29



28



37



男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ

—府営ため池等整備事業泉南Ⅱ期地区（双子上池）に伴う—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪府大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2004年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL 06-6976-8761

